

2025年3月

『2024 年度 私の一冊』

	著書名	著者	出版社	発行
【吉川五百枝】	『人類はどこで間違えたのか 土とヒトの生命誌』	中村 桂子	中央公論新社	2024
【 YA 】	『求道の越境者・河口慧海 チベット潜入ルートを探る三十年の旅 』	根深 誠	中央公論新社	2024
【 ZK 】	『西洋菓子店 プティ・フル』	千早 茜	文藝春秋	2019
【 JM 】	『チェレンコフの眠り』	一條 次郎	新潮社	2022
【佐村蘭子】	『大人になってもできないことだらけです』	きしもと たかひろ	KADOKAWA	2022
【伊達悦子】	『やっぱり おおかみ』	佐々木 マキ	福音館書店	1977
	『オーロラの下で』	戸川 幸夫	金の星社	1990
	『ゆきは天からの手紙 中谷宇吉郎エッセイ集』	池内 了／編	岩波書店	2002
【 T 】	『森にあかりが灯るとき』	藤岡 陽子	PHP 研究所	2024
【 N2 】	『昭和 16 年夏の敗戦』	猪瀬 直樹	中央公論新社	2010
【 KH 】	『世界平和はナマコとともに』	本川 達雄	阪急コミュニケーションズ	2009
【 K子 】	『トモスイ』	高樹 のぶ子	新潮社	2011
【 Sちゃん 】	『藍を継ぐ海』	伊与原 新	新潮社	2024
	『ボンジュール, トゥール』	ハン・ユンソブ	影書房	2024
	『クジラがしんだら』	江口絵里／文 かわさきしゅんいち／絵	童心社	2024
【望月悦子】	『広島へのさまざまな旅』	大江 健三郎	全国学校図書館協議会	1992
【 MM 】	『義父母の介護』	村井 理子	新潮社	2024

竹原読書会 2025 年 3 月 私の 1 冊

『人類はどこで間違えたのか』(中村桂子著 中公新書 2024)

(2025 年 2 月 21 日「毎日新聞オピニオン欄」(中村桂子・文)を加えて)

肥大化した〈私〉への警告を読む

吉川五百枝

主たるテーマ「私たち生きもののの中の私」(生命誌による)

……〈私〉が居なくなっても「《私たち》生きもの」は居る ……

「わたし」は 2 つの視点を持っている。

① 〈私〉を主観的に見る。固有の名前を持ち、肉体的に 1 つの姿をもっている。いかなるものをもってしても代替がきかない。地球史上1回だけの生である。

② 《私》を客観的に見る。固有の名前は意味を無くし、ヒトを構成する1要員である。

《私たち生きもの》は、〈私〉を含むが、40 億年前に生まれ、そこからの連続したあらゆる生命体のことである。

『私たち生きもののの中の私』というのは、『《私たち生きもの》の中の〈私〉』のことである。〈私〉が束ねられて《私たち》になっているのではなくて、《私たち》があつて、その中に在る単体の〈私〉が認識できる。

西洋で〈私〉を発見した近代は、〈私〉の役割がいかに大きいかを知らしめて、〈私〉を大切にすることを強調しました。「個人主義」と言いますが、明治期に日本でこの〈私〉を紹介した夏目漱石の「個人主義」という論調は、「自分だけを大切に」という意味ではありませんでした。「個人」つまり〈私〉は、絶対値を付けて語られていると思います。足したり引いたり比べたりするものではない、と。

ところが今や、〈私〉は、独りよがりになり、〈私〉が世界を作っていると言う振る舞いが平気になってしまいました。本来《私たちいきもの》なのに、〈私〉は地球の王様だという気持ちになっているのです。その思い上がりを、「肥大化した〈私〉」と表したいのです。

〈私〉のお金が全ての価値基準であつたり、〈私〉の得になるなら気候変動もかまわない、〈私〉を縛る法律は無視するし、あなたの傷みは〈私〉とは関係が無い。

こんなことは、〈私〉の許容範囲ではありません。傍若無人になってセルフコントロールができなくなっています。

だから、今、〈私〉のダイエットが必要なのだと感じます。

〈私〉のダイエットの必要を発信しているのが「生命誌」の考え方ではないでしょうか。この考え方は、王様然としている〈私〉に、警告を発します。

『人類はどこで間違えたのか』(中村桂子著 中公新書)これです。

〈私〉のことだけではなく、同じ強さで《私たち》を考えろ、と。そうしなければ、《私たち》も〈私〉も壊れてしまうぞ、と言われます。

〈私〉のダイエットが必要です。

ダイエットの方法は、西洋からの流入を待つまでもなく、日本では 552 年に入って来ました。日本語として 1500 年も馴染んで居る外来語です。「諸法無我(しょぼうむが)」がそれで、人の身の言葉では「相依(そうえ)」と説明されてきました。

相依とは「彼あるによってこれあり これあるによって彼あり」であり、全ての事物は関わり合っているという意味です。お互いが支え合ってこそ成り立つという意味です。

さまざまな条件が影響し合って実体が現れる。その条件のことを一般的には「縁」と言っています。たいていの場合「不思議なご縁で」と言われて、珍しい言葉ではありません。この身体そのものも、さまざまな要素や縁が寄り集まって実体として「わたし」と言っていることは、「生命誌」の言われることでしょう。

これは、自己中である〈私〉のダイエットをするための現代的思考として当てはまるのではないかと思います。

アラスカで、ヘラ鹿の雄同士が欲望のために戦い、絡み合って解けなくなった立派な角を残して2頭とも骨になった写真を見たことがあります。あの姿が、肥大した〈私〉の姿ではないでしょうか。自分さえ良ければと利益を追求しても、最終的には〈私〉も壊れてしまうのです。全てが関わり合って存在する故に、「自利利他円満」(自分の利がそのまま他の利となる)という言葉も1500年生き続けた智慧の言葉です。

1500年も流れ続けたそれらダイエットの智慧を、思い出したい。ことある度に、この言葉を使いたい。

「生命誌」の発信にも期待します。

考えの発信は、受信を伴います。この「発信・受信」を「対話」と呼ぶのではないのでしょうか。もちろん生きた人間同士の「対話」が望みではあるけれど、歴史を持つ発信は、本であってもかまわない。

今回、読書会の「本」として紹介したのは、『人類はどこで間違ったのか』(中村桂子 著 中公文庫)ですが、「わたし」が〈私〉と対話できるのです。本の中では《私たちいきもの》も、対話の相手になってもらえます。

時々分子生物学者の福岡伸一氏もひょいと顔を出される。「物は本来、利己的ではなく利他的です」(朝日新聞2/2)などと言う具合に。福岡氏が「利己的に振る舞ったものだけが生き残ったというのは間違い。」と言われます。これは〈私〉が聞かなければならない発信です。「植物が自分の利になるだけの光合成しかなかったら、地球上に他の生物は存在しないだろう」と「自利利他」の仕組みを書かれています。

中村氏が、「人類の間違い」と言われる中身に、福岡氏の賛同記事が声援を送られているようで、声が大きくなって聞こえてきます。

「本」は一方向的に喋ってくるわけではなくて、これまで出会ってきた「本」が、「わたし」の思いを共同作業のようにすいあげてくれるのです。

「生命誌」という言葉は、身近にあったわけではありません。「生命誌」の年輪はまだ少しだと思っています。だからこそ、本で、新聞で、その都度〈私〉への警告を聞き逃したくないのです。

読書会で語り合う事、「対話」は、警告を自分のものにする事です。

◆ 【 YA 】『求道の越境者 河口慧海 チベット潜入ルートを探る三十年の旅』

根深 誠

1947 年生まれ 明大山岳部 日本山岳会員

73 年以來ヒマラヤの旅を続ける。1898 年慧海がチベットに向けて旅立った凡そ 100 年後、1992 年慧海の謎に満ちたその経路を 30 年以上に渡って現地調査する。

河口慧海(1886-1945)

日本や漢語の仏典に疑問を覚え、仏陀本来の教えの書を求めて梵語原典やチベット語訳仏典の入手を決意し日本人として初めてチベットへの入国を果たした。当時チベットは鎖国、単独で 5 年の歳月をかけてチベットに入る。チベット人僧と偽り大学に入り、一部の人には支那人として接し私は、2 つの秘密を持ってしまったと。1 年ほどチベットで生活し 1903 年無事 6 年振りの帰国を果たす。

著者根深誠は慧海の膨大な[チベット旅行記]に接し色々と知識を得て、慧海の辿ったルートを踏査することを決意。彼の目的はあくまで慧海の明治時代のルートを見極めることだった。慧海は先ずインドはカルカッタに到着、1 年ほどかけてチベット語を学び、ブッダガヤに参り、カトマンズに入る。山岳国ネパールでは夥しい村村や場所に立ち寄り困難な足跡を残している。著者が本の中でネパールの地図を載せているが、100 年以上前の環境は想像を絶する巡礼だっただろう。又慧海はネパール西部ムスタンの村に 10 ヶ月以上滞在している。山々に囲まれた寒村での生活、体を休ませていたのだろう。

著者の 30 年に及ぶ最大の関心事は、慧海の国境越えは、いったいどの場所だったのかだった。3 ヵ所の有力な峠はわかっていたらしいが、著者は沢山のお年寄りの話や調査から、ゴップカラ・ラ峠と断定。ネパールからチベットへの平均高度 4 千メートル以上のヒマラヤ越えは正に命をかけた闘いだっただけに違いない。著者も現在の 30 年間の十数回のチベット行で栄養失調に陥ったり、高山病に罹る等々、何回も命からがら帰国したと述懐している。現在でもチベットは謎めいた魅力ある場所であり、その象徴ポタラ宮は標高 3 千 7 百メートルに凜として聳え、高さ 117 外観 13 層部屋約千室、菩薩の化身ダライ・ラマが住むチベット教の聖地であり、ミイラとなったダライ・ラマたちがここに眠っている。

因みに慧海の[チベット旅行記]は日本出発からチベット入国までの死闘苦闘等、慧海の行動、出来事が詳しく記されている。又 1 年に及ぶチベットでの生活を含む膨大な全てのことが記録されている。これを読めば、チベット全てのことが理解出来ると言われた。やはり私のクライマックスは、国境越えで、あの強靱な精神と肉体を持つ慧海でさえ、死を覚悟していた。

◆ 【 ZK 】『西洋菓子店 プティ・フル』

以前お菓子作りで面白い小説ならこれですよ！と、図書館の係の方に親切に教えてもらい読むことにしました。

お菓子作りにも興味があり特に業界のことを知りたくて読みました。が、勿論ストーリーがメインです。そして紅茶のお店とかティータイムばかり出てきます。

そしてお菓子はシュークリームから始まり色々出てきて色鮮やかなカラフルなお菓子が出てくるのです。

思い出と香りと色彩豊かなお菓子が出てきます。

これといって特別なストーリーではありませんが短編で同じ人物がでてきました。それぞれの日常、人生を描いています。

◆【 JM 】『チェレンコフの眠り』

今年度の「わたしの1冊」は『チェレンコフの祈り』である。作者の一條次郎氏は1974年生まれ、2015年に『レプリカたちの夜』が第2回新潮ミステリー大賞を受賞、2022年に本作『チェレンコフの祈り』が第35回山本周五郎賞の候補になっている。

この本を手にとると、まず表紙がイカしてる。「可愛い」「素敵」ではなく「イカしてる」のである。朱色がかかったピンク地(サーモンピンクっぽい)に、胸にヒトデをつけ、脇にアンモナイトを抱えたアザラシがすくくと立っている。そしてその顔はにんまりと笑っている。いわゆるドヤ顔である。裏表紙はその後ろ姿で、なんと背中にはカブトガニ。背筋の伸びたその姿は凛とした自分の意志を持っているようで、神々しくさえある。表紙に惹かれて購入するのを「ジャケ買い」(レコード世代の私にとっては懐かしい響き)というそうだが、この本はその「ジャケ買い」する人が少なからずいるようで、納得である。

このアザラシはサハリンマフィアのボス、シベリアーリョ ヘヘヘノヴィチ チェレンコフのペットで、名前はヒョー。ボスの名前の「シベリアーリョ ヘヘヘノヴィチ チェレンコフ」という名前がいい。私は外国を舞台にした物語、外国人が出てくる物語が苦手なのであるが、それは名前が読みにくいからである。その話をある司書の方に話したところ、「読みにくい名前なんて読み飛ばせばいいんですよ」と言われたが、読み飛ばせたら苦勞はしない。真面目な性格できちんと読もうとするから大変なのである。しかしこの「シベリアーリョ ヘヘヘノヴィチ チェレンコフ」という名前の響きはすっかり気に入ってしまって、出てくるたびに声に出して読んだ。作者もそうらしく、何度も出てくるこの名前を作品の中で省略することなく「シベリアーリョ ヘヘヘノヴィチ チェレンコフ」と書いている。だから、私のこの感想も省略することなく「シベリアーリョ ヘヘヘノヴィチ チェレンコフ」と書くことにする。

物語はシベリアーリョ ヘヘヘノヴィチ チェレンコフの誕生日パーティーのさなか武装警官集団が突入してきて、シベリアーリョ ヘヘヘノヴィチ チェレンコフが死んでしまうシーンから始まる。シベリアーリョ ヘヘヘノヴィチ チェレンコフは極悪非道な男だったが、ヒョーには優しくかった。過保護なほど可愛がっていた。その庇護者を失い、ヒョーは1人で生きていくことになる。

ヒョーの住む世界(近未来の地球)は、地震による原子力発電所の事故で放射能汚染され、プラスチックのゴミの山、墓地が足りず遺体を海に捨てていると温暖化の影響で竜巻に巻き上げられ、空からプラスチックと共に降ってくる・・・というような世界である。そんな世界の

中で、ヒョーは生きていく。

文中に「コンクリート・アスファルト・コンピューターなどの人工物が地球上の全生物の総重量を超えている」「野生動物の最大の敵は人間」「経済活動のおかげで地球はぼろぼろ」…とあるが、これはフィクションではなく現実だ。しかし、悲惨な状況が描かれているのにも関わらずユーモアがあり、読みやすい。

この本を読んでいて井上ひさし氏の「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを愉快地、愉快なことを真面目に」を思い出した。

今まさにわたしたちは、この作品を SF の物語にするか、ノンフィクションにするか、その岐路に立っている。私はノンフィクションに限りなく近いと思っているが、でも、まだ SF にする余地があるのではないかと、今ならまだ間に合うのではないかと…とも思う。

1 人で生きていくヒョーが健気である。そのヒョーに「ごめんね」と語りかける。

◆ 【 T 】『森にあかりが灯るとき』

特別養護老人ホーム「森あかり」で働く介護士、看護師、医師、施設長がそれぞれの立場で、介護について、命について、見取りについて悩みながらも真摯に取り組んでいる様子が描かれている。

延命第一主義の見取りはやめたいと医師の葉山は思う。

〈この国ではいつから、口から食べ物を摂取できなくなった人に、人工的に栄養を体内に流し込むことが当たり前になったのだろう。意識があり、回復の見込みがある人にならまだしも、もう自分の意思を伝えられなくなった人にまで延々と、その命が尽きるまで栄養を入れ続ける。＝延命至上主義＝それが今の日本の介護現場を逼迫させ、そして将来的に崩壊させる原因になることをなぜ真剣に、切実に、問題視しないのだろう。〉

延命をしてほしいと願う家族がいれば、延命を望まない家族もいる。どちらが正しいと決めつけることはできないが本人の思いが分かっている場合や家族の思いがあれば、本人や家族が望んでいない処置を無理やりするのは間違いではなからうか？ 姑が入院して自分で食べ物を食べられなくなった時、胃ろうをしましょうと病院から提案された。一度は断ったが、しないなら家に連れて帰ってくれと言われ、胃ろうの処置を受けたことがある。終末期には食事量は落ちるのは当然で、食べられないからといって経鼻胃管・胃ろうをして延命するのがいいのか、それとも、食べれないなりに穏やかな終末を迎えた方がいいのか皆が考えていかなくてはいけない問題だ。

〈2040 年に 65 歳以上の高齢者、75 歳以上の後期高齢者の人口はピークを迎え、社会保障制度の維持はあやぶまれる。〉とされている。2040 年には、私も介護が必要になっている可能性がある。今までは、ロボットによる介護には拒否感があったがこの本を読んで、ロボットを介護の現場で使うことも大切な事だと思った。入浴支援ロボット・自立支援型ロボット（要介護者の動作を助け、できる限り自立した生活が送れるようアシストする）移譲支援ロボット・見守り支援ロボット・機能訓練支援ロボット…上手にロボットを活用することで介護の現場も変わってくるし、変わっていかなくてはならない。

医師葉山が尊厳死について次のように述べている。

「尊厳死を可能にするのは、その環境を作る人たちでしょう？ だったら介護者の尊厳をまず守らなくてはいけない。現場で働く人たちを支えることが今いちばんすべきことで…」

この本で、自分の老後をあらためて考えるきっかけとなった。

◆ 【 N2 】 『昭和 16 年夏の敗戦』

8 月 15 日は毎年やって来ます。6 月 23 日、8 月 6 日、8 月 9 日そして 12 月 8 日もです。読書会では年に一冊戦争に関する本を読んでいるのですが、戦争はなぜ起るのか、それに関わる者は誰か、何か、どのような影響が出るのか、どう結果が出るのか、どうしたら良いのか私にははっきりとはわかりません。

2024 年度の NHK ドラマ「虎に翼」の主人公の再婚相手は、敗戦、戦死者に話が及ぶと毎回苦悩の表情を表すのですが、なぜか、その理由は彼、三淵乾太郎氏が総力戦研究所の研究員だったからということがドラマの後半でわかります。

この本は 1983 年 8 月に単行本として発刊されました。当時から読んでみたかったのですが、とても読みづらく、軍隊組織もわからず、なれない単語や人物名に途中で断念していました。しかしこのドラマで総力戦研究所の名前が出たので、それに触発されてとにかく読み終えようと決心したのです。

総力戦研究所は陸海軍とは独立した組織で、昭和 16 年 4 月 1 日 36 名の平均年齢 33 歳の様々な官僚や民間人を集めてスタートしました。優秀な彼らが数値データを集めて出した結論は「12 月中旬に奇襲作戦が成功しても、物量に劣る日本に勝機は無く、長期戦になるとソ連参戦を迎え敗れる。だから日米開戦はなんとしても避けなければならない」というものでした。しかしながら、この結論に陸軍上層部は耳を傾けず戦争に突入してしまい、この結論に沿った結果となってしまいました。最後は神風と大和魂に頼るという根拠なき自信や根性論を唱えている戦争でもありました。大和魂が有ればヤンキー魂も有るのです。昭和 17 年 6 月 5 日から 7 日のミッドウェー海戦での 4 空母喪失時にはすでに勝負が決まっていたのですが、大本営はそれを隠し、それ以降 1945 年 8 月まで、戦争は延々と続き沢山の死者を出してしまいました。

研究員は早い時期に日本必敗を予感していましたが、その見通しを何か現実にかき立てて戦争を回避しようという算段はほとんどしていません。東条英機も同じメンタリティーだったのでしょう。わかっているのに勢いに押し流されていくしか無い、ということでしょうか。以前に課題図書としてあげられた加藤陽子著『日本人は「戦争」を選んだ』にも共通する「流れに乗ってしまう」ということなのでしょう。

難しいことかもしれませんが、国民ひとりひとりが世の中の流れに流されず、自分の頭でことの是非を考えていたら結果は違っていたのでしょうか。昭和 16 年 4 月、7 月、8 月、9 月、10 月、11 月そして 12 月の開戦までの日々の交渉や会議の様子、内閣の動き、研究員の思いや意見など、時々刻々の動きや不安と焦り東条の心情などが読み取れます。

2022 年 2 月に始まったウクライナ戦争も 3 年目に入り今のところ先が見えません。各国の

1人の兵士の後ろにはそれぞれの家族がいます。戦争がなぜ起るのかは本当に難しく、何とか回避できる方法は無いかと思います。

◆【 KH 】『世界平和はナマコとともに』

ガザ地区のイスラエルとパレスチナ問題。ロシアとウクライナ。いずれも間にトランプさんが入ってきてどうなるのか、先日テレビを見ていたら、軍需特需でロシアの景気は大変上向き。となると早く戦争をやめてよと言う空気にはならんよなあと、ため息しか出てこない…

中東やヨーロッパどころか、日本だって隣国との間であれこれと摩擦や揉め事、さらには知らない間に大切な宝物(水資源、山林、自然)がしれっと買い叩かれているやもしれず、日々流れてくるニュースはどれも漠とした不安を(いや本当はもっと切実な不安を抱くべき)募らせるものばかり、かといって私に何ができる…何もできない。

そんな日々の中で出会った衝撃的な本
折しもこの本に出会う数日前に、あか〜い立派なナマコを沼隈の道の駅で手に入れた。
10数年ぶりに、自ら下ごしらえするにあたり、YouTube で検索
画期的な方法として紹介されていたのは、まず“ナマコ氏”をまな板に乗せ、大量の塩をふりかける、その上から、体長プラス1から2センチほどのボールでもザルでも被せ、左右に振り続ける。2、3分後、ボールを持ち上げると、あのぬめぬめが見事塩と一緒に取り去られ、素肌もあらわになったナマコ氏がまな板に横たわっている。綺麗に洗い流したら、さらに包丁で真ん中に切れ目を入れ内臓を取り出し、洗って刻む。大根おろしを添えて、ポン酢をかければ美味しい酒の肴ができあがり。美味しかった。

ところが、ナマコ氏の生態を知ってしまった私は、自分の残虐さ、慈悲のなさに申し訳ない気持ちでいっぱいになった。人間は、地球もぐちゃぐちゃにし、それだけでは飽き足らず、宇宙にまでも手を広げ、足元に目を転ずれば、平和極まりない生き方を選択して生き延びてきたナマコまで切り刻んで酒の肴にする。私もナマコ氏受難の加担者の一人になっているなんて。ナマコはきっと人間を恨みに思うこともなく(なにせ脳がないのだから。。。)ひたすら砂を食んでいるのだけれど。冒頭の偉そうな言葉は全て風呂敷に包んで、もう2度とナマコは食べませんから堪忍してくださいと心に誓った。でもね、ナマコに限らないよ、人間が食べているものすべて、他の命を頂戴しているのだから、なんでナマコだけ特別に感情移入するの？という声も同時に聞こえてくる。あまりにも無力というか、無抵抗なものへの仕打ちではないかと、ひど過ぎるではないかという後ろめたさが拭えないからだろうか。

地球上にくらしているたくさんの生き物の一つでしかない人間。とか言いながら、例えばナマコの生態を知って初めて、己の残酷な行為に驚く。平和が、戦争がとは軽々しく口に出せないではないか。でも私がナマコを食べない、殺さない決意表明したところで何も変わらない。しかし、せめてナマコについて、筆者の話を通して足元からものを考える。そこから平和への一步を踏み出したいと思った。

著者の本川達雄氏は、『ゾウの時間ネズミの時間』で有名な動物学者。

ナマコは、省エネに徹することにより、地上の天国を実現したのと対照的に、人間は膨大

なエネルギーを投入して地上を変革し続けた。我々の生き方を考える教訓は、ナマコの生態、進化の過程にたくさんある。と著者はいう。

筋肉も捨て、脳も手足も捨て、食べものは砂のみ。生きていくのに必要なエネルギーは、同じ大きさのネズミの1/100、エビや貝の1/10から1/5だという。

砂の上でとにかくジーツと横たわっていて、攻撃してくる魚には、唯一の自衛手段であるサポニンを放出、それでも諦めない魚には、自らの腸を放出して、食べさせている間に、全速力(なまこにとっての)で逃げるとか。全く涙ぐましい努力で、敵から逃れ、生き抜いてきた。筆者曰く、「これは、とても柔軟で頭の良いやり方に思えるのだが、ナマコは脳をもっていないのであった。」爆笑。

論は進んで、さらに文豪夏目漱石とナマコの縁。というか、漱石と大親友であった正岡子規の、子規自身がナマコだったという29歳の時の記述を紹介している。「天地の混沌として未だ判れざる時腹中にもものあり恍たり惚たり形海鼠の如し、海鼠手を生じ足を生じ両眼を微かに開きたる時化して子規と為る」この子規とのやりとりを基にして、漱石先生は、長女筆が生まれた時に、以下の句を読み、子規に「君のような子が生まれたよ」と報告したのではないかと、筆者は推測している。～安々とナマコの如き子を産めり～

子細を知らなければ、妻鏡子さんの産みの苦しみも知らず、安々ととか、ナマコの如き子などと言えたものだと総攻撃されそうだが。

さらに、雅びやかではないナマコは、決して和歌には読まれないが、俳句にとってもふさわしいとして、爆笑せずには読めない俳句の紹介が続く。本川先生って面白い。

動かぬナマコを見ていたら、禅寺での座禅を思い出した本川先生。

動かない動物の動きをじっと見る、矛盾。正に隻手だと。さらに、ナマコの時間は僕らのものとは違うのではないか。動かないナマコと、いつもせかせか動き回る僕ら人間と。ここから、『ゾウの時間ネズミの時間』で有名な先生らしく、物理学的時間ではなく生物の時間論を展開される。脳どころか心臓も持たないナマコ相手に、よくもこんな面白い考察を繰り広げられるものだと、読みながら舌を巻く私であった。やはりこの世に絶対なものなどないんじゃないのというところに、私は落ち着くのだけれど。

科学者である本川先生は、脳も心臓もないナマコについて、エネルギー消費量という切り口から考察されている。エネルギー消費量を測れば、その動物の時間の速度を数字ではっきり示せるそうで、それを「代謝時間」と先生は呼んでおられる。ナマコは人間の1/50のエネルギーで生きている。そうで、ナマコの代謝時間は、人間の50倍ゆっくり(ナマコの2日分を人間は1時間で生きているという)

やはり人間はせかせかしすぎ、無駄なエネルギーを使いすぎているよなあ。

ナマコを尊敬してやまない本川先生は、最後にこうおっしゃっている。尊敬しているナマコが好きになったわけではない、と。えっ！本川先生、ナマコ愛に溢れておられるとばかり思っただけで読み進めてきたのに、、、ここにきて裏切られるとは。しかしこうおっしゃるのだ。理解できれば尊敬できるようになる。そうなれば嫌いでも付き合いはいけるのであると。

好きなことに大きな価値を置き、嫌いなものとは付き合わず、できればそんなものは滅ぼしてしまおうとするのが、近頃の付き合い方であろう。正に今の世界情勢ぴったりではないか。これはあやういとおっしゃる。その通りだと深く共感できたエッセイだった。世界平和はナマコ

とともに なのである。

さらにおすすめなのが、合わせて収録されている3つのエッセイ。

2つ目は、ヒトの時間と「少子高齢化」

3つ目は、歌う授業で教育改革

退屈な(失礼)生物の授業中の居眠り対策と、一般教養の単位され取ればいい的なやる気のなさ(ひどいテスト結果)をなんとか改善したいという、先生の苦肉の策だったらしいが、持ち歌100曲以上、CD も出しておられるというから凄い。このエッセイの中に、理系から国語科に期待することという項目がある。「われわれは言葉で考え、言葉で意思を伝え合う。学びの一番の基礎は言葉の学習であり、特に小学校では言葉だけを教えれば良い。数式も言葉の一種だから、全ての教科を『拡大した国語』と考えて構わない。」と続く。ただし純文学至上主義の国語ではなく、論理的な、明晰な論理を用いて文章を書く方法を教えて欲しいとのこと。さらに、言葉による自然のスケッチができるように訓練して欲しいと。短い単語による感想、コメントのやりとり慣れ親しみ、他とのコミュニケーションはほぼ単語の羅列そして絵文字などの記号により成立しているのは、何も小学生に限らない。携帯メール、チャット、さらに重大なのは、「それらはなんら責任を伴わないコミュニケーションだということだ」と、筆者は指摘している。「自分の言葉に責任を持つ、責任の塊なのが理科の文章だ」と。この訓練がないままに、大学院に上がってくるから、修士論文が一言もかけない という学生が出現することになると知り、驚いた。でもそうよねえと納得もする。

4つ目のエッセイ 寿司サイエンス vs ハンバーガーサイエンス

驚いたのは、「科学」というものの考え方が西洋と東洋で違うという筆者の論。まず第1のパネル「料理」の違いから入り、次に「宗教」のパネル。ここでは仏教 というよりは“禅”とキリスト教を対比させて説明されている。禅について不勉強なので、仏教全体を禅で括った話となると違うかなあというところもあるような気はするが、対比としては、とてもわかりやすい。3つ目は「科学」のパネル。科学を西洋と東洋に分けた説明を試みられている。

科学のパネル

西洋 vs 東洋

斉一性／普遍性 vs 違い／特異性

解釈 vs 無我(解釈を避ける)

言葉(概念)が本物 vs 事実が本物

仮説 抽象的、統一的 大理論 vs 特定の事実 具体的、客観的、詳細な観察、

熟練した実験

これら3つのパネルによる説明は、とても面白いと思った。生き物の融通無碍さ、ダイナミックな柔軟性。生命誌という捉え方、動的平衡。頭の中はちっとも整理されないが、ぐるぐる考えることこそ読書の醍醐味なのだ。私にとっては。

◆【K子】『トモスイ』

高樹のぶ子著です。10の短編から構成されています。

- ① トモスイ
- ② 四時五分の天気図(この作品の舞台は台湾です。台湾の離島で実際に起きたこと)
- ③ 天の穴(フィリピン)
- ④ どしゃぶり麻玲(マレーシアのクアラルンプール)
- ⑤ 唐辛子姉妹(韓国)
- ⑥ 投(上海)
- ⑦ モンゴリアン飛行(モンゴル)
- ⑧ ジャスミンホテル(ベトナム)
- ⑨ ニーム(インド)
- ⑩ 芳香の記(インドネシアのバリ島)

どの作品も感性豊かに語られ、水に共通・強烈な匂い・肉感を東南アジアに感じる。

私の一番のお気に入り、タイトルにもなっている「トモスイ」です。タイ訪問からの作品です。川端康成文学賞を受賞しています、タイは第三の性に寛容な仏教国です。究極の自由な性が描かれている様に思われました。主人公の相手の名前はユヒラさん(片仮名表記)。年下・妻子持ち、性別からすると男性のようですが、ロン毛・化粧もする。内容は二人が入江の小舟に乗って夜釣りに出かけます。その時の様子が描写されています。キスをした時にブロッコリーを茹でた時のような濃い目のお湯の匂いがした、と描かれています。私はこの一文がとても好きです。他の作品にも匂いが多く登場します。「トモスイ」とは二人が釣り上げた獲物の名前です。どんなものか想像が付きません。えたいの知れない気色の悪さを感じました。身体で感じた曖昧でおぼろげなゆらぎが強い読後感です。

◆ 【 Sちゃん 】

一般書 『藍を継ぐ海』 伊与原 新著 新潮社

5編の短編からなる。心をつかんで離さないのは次の2編。

「狼犬ダイアリー」……東京で夢破れたまひろは、奈良県東吉野村に移住。だが、人見知りで負け犬を自認するまひろはコミュニティに馴染むことができない。ある日、まひろはオオカミの遠吠えを聞き、その姿をみる。ニホンオオカミと紀州犬の間に生まれた狼犬。主が亡きあとには縄張りを守り、送り狼となってそこに入る者を見守る。孤独でも崇高な生き方を見て、まひろは独りのときはオオカミのように、でも寂しくなったり行き詰ったりしたら従順な犬のように誰かを頼り甘えればいいことを悟り成長していく。まひろの健気な生き方に共感する。

「祈りの破片」……長崎の原爆が根底にある。小寺は町役場の職員。町民からの苦情で「怪しげな」空き家の状況を調べるうちに、そこに貴重な資料があると判明する。資料を書いた人物たちが過酷な現場を訪ね歩き真相が解明するたびに過去の人々の生き方に感銘する。小寺の最初は疎ましく思っていた仕事に、やりがいを見出していく姿に思わず応援したくなる。

伊与原新の作品は、科学と人の営みを縦の糸と横の糸のように巧みに織りあげ、作品を

紡いでいく。

児童書 『ボンジュール、トゥール』 ハン・ユンソプ著 キム・ジナ絵 呉華順訳 影書房

フランスの美しい街トゥールに引っ越してきた 12 歳の韓国人の少年ボンジュ。引っ越し先の家の古い机には、「愛するわが祖国、愛するわが家族……生きぬかなければ」とハングルで書かれた謎の落書きが。学校では日本人トシと親しくなろうとするが、トシはなかなか心を開かない。やがてトシは、自分の本当の出自（朝鮮民主主義人民共和国）をボンジュに打ち明ける。朝鮮戦争による分断を背景に、二人の友情と別れを描き、国際社会の中で生きるアイデンティティを考えさせられる。

**絵本『クジラがしんだら』江口絵理（著）、かわさきしゅんいち（イラスト）、藤原義弘（監修）
童心社**

国立研究開発法人海洋研究開発機構の藤原義弘氏による監修である。

クジラが死んだらどうなるのか？—深海という厳しい世界に生きるユニークな生きものたちの、ひとときの大宴会を描いたような絵本。深海はえさが少なく、生きものが少ない場所。ところが、ごくまれに巨大な食べ物のかたまりが降ってくる。それが命を終えたクジラ。クジラの体は、長ければ 100 年にもわたってさまざまな生物の命を支え続ける。このクジラの死骸を中心に形成される特殊な生態系は「鯨骨生物群集」と呼ばれ、近年の研究でその実態が明らかになってきた。研究者の努力の賜物である。

絵本を閉じる際には、福岡伸一氏の「動的平衡」や生物化学者ルドルフ・シェーンハイマーが唱えた「生命は機械ではない。生命は“流れ”だ」という言葉をかみしめた。深海も宇宙だった。

◆【 MM 】『義父母の介護』

2年前、その年の私の一冊に村井理子の本を選んでから新刊が出るたびに読んでいる。村井理子は翻訳家、エッセイストだ。今年度も彼女の本を何冊か読んだが今年の一冊には『義父母の介護』を挙げる。

これまで村井さんは『家族』『兄の終い』『実母と義母』などを書いている。身の回りで起こったことを記録し、出版してきた。壮絶、爆笑、稀有な体験などさまざまだが、とにかく記録し、その中から出せるところだけを本にしているらしい。本に書けているのはほんの一部、表に出していない部分がほとんどとのこと。ここ数年の村井さんは翻訳や執筆、地方での講演などの仕事をしながら家事をこなし（高校生（当時）の双子がいる）、別居の義父母（義母は8年前から認知症、義父は90代）のケアもする。義父母の介護はもっぱらプロに任せているが、病院への送迎や突発のトラブルの多くは彼女が対応している。

聞くだけで目が回りそうな日常、しかしそれを覗いてみたくなる。実でも義理でも介護は他人事ではない。介護をするのもされるのもこれから自分の身に起こりうることだ。

かたくなに同居をしない筆者と同居したい義父。夫は介護にやっと関わり始めたところ。これからは夫が足しげく実家に通うことになるだろう、と村井さんは書く。これまでは村井さんが

毎週末実家に顔を出していたが今は夫がやっているそう。「仕事で抜けられない」「突発的なトラブルの対応はよろしく」など、村井さんは自宅で仕事をしているので当たり前のように頼んでくることもある。綱渡りの別居介護がどうなっていくか読者としては目が離せない。

義父はとにかく寂しがり屋で義母がデイケアに行くのを勝手に当日キャンセルすることも一度や二度ではない。義母をそばに置いておきたいが世話をしきれない。義父が目を離れたすきに義母が外に出て探したこともある。日々起こる事件は大変でしかないのだが、いつも少しのユーモアを交えて書いている。そういうふうに関心を持っているようだ。

私が村井さんの文章が好きなのは大変な日常の中でもクスッと笑ってしまうところ、書くことによって自分と向き合っているところだ。村井さんの家族(父母・兄)はみんな亡くなっている。村井さんは義父母の世話を通じて実の両親にできなかったことを振り返る。認知症になる前は徹底的にいびられていた義母とも穏やかに笑い合うこともある。村井さん曰く、女同士だからわかることもある、とのこと。こういう文章を読むと私も自分だけの立場だけで考えてはだめだなあと思い知らされる。